Osaka University Knowledge Archive

Title	スピノザにおける「神の存在証明」
Author(s)	堀江, 剛
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1999, 33, p. 41-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5732
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

スピノザにおける「神の存在証明」

堀江　剛

神の存在証明は、倫理・宗教的な問題を「証明」という論理的な操作によって根拠づける作業として、中世から近世におけるヨーロッパの伝統の中で特殊な位置を占めてきた。スピノザもまた『エチカ』の冒頭で神の存在証明を行っているが、それは次の点で際立っている。すなわち「神あるいは自然」もしくは「神はあらゆるものの内在的原因であって超越的原因ではない」(1p18)[1]という言葉が示しているように、自然における事物の存在を根拠づけるために自然の外部領域にある存在を全く想定しない、ということである。そこでは神存在の問題と自然存在の問題とが、同じ一つの領域にあるものと見なされ、そこで同じ一つの論理が展開されている。

この意味で、スピノザの神証明は、倫理・宗教的な問題を自然認識の論理によって補完しようとしたり、後者の論理が尽きるところで前者の領域を確保しようとする神の存在証明とは、本質的に異なっている。また、神存在の問題を合理主義的な自然認識の論理によって切り捨てたのでもない。このような考えは、いずれにしても神と自然との領域の区別を前提にしている。本稿は、スピノザにおける神の存在証明（『エチカ』第一部定理一～十一）の考察を通じて、この二つの領域が区別されない「論理」の在り方を浮き彫りにしようとする試みである。

一　実体と属性

最初の定理一～八では「同一属性を持つ実体は自然の中でただ一つ存在する」ことを証明するのが問題になっている。それは次の二つの段階に分けて論証されている。[2] 第一に「実体はそれ自身のうちに在り、それ自身によって考えられなければならない」(1d3)から「知性が実体についてその本質を構成している」(1d4)別の属性を持つ実体とは「相互に共通点を持たない」(1p2)。従って別の実体から「産出されることができない」(1p6)。つまり、他の実体を原因とするような実体は存在しえない。故に「自然のうちには同一本性あるいは同一属性を持つ二つあるいは複数の実体は存在しない」(1p5)。第二に、他の実体を原因としないものは「自己原因」と見なされる。自己原因とは「その本質が存在を含む、あるいはその本性が存在するとしか考えられないもの」(1d1)である。それ故、自己原因である「実体の本性には存在することが属する」(1p7)ことになる。こうして「同一属性を持つ実体は自然の中でただ一つ存在する」と結論されるのである。

第一の段階でスピノザは、実体と属性の定義から形式的に帰結されること以外には、基本的に何も結論していない。一般に実体・属性関係が「Sは P である」といった認識や判断の基本的な形式を表現すると考えるならば、スピノザはその基本形式を、幾つかの公理と実体・属性に関する自らの定義を組み合わせることによって展開したに過ぎない。しかしそこから、伝統的な存在論や論理学から見れば及びもつかない結論、すなわち「自然のうちには複数の実体は存在しない」という結論を引き出した。この論理をより詳しく見るために、実体・属性に関するデカルトとスピノザの考え方の違いを比較してみよう。

デカルトは、実体に関して「存在するために何も要しない」もの（神）と「神の協力によってのみ存在しうる」ものとの区別を最初から前提にしている。[3] また属性に関しては、「各々の実体には一つの主な性質（属性）があって、これがその実体の本質を構成し、他の全ての属性はこれに帰着せしめられる」と考えている。[4] しかしスピノザは、実体の内容や単数・複数にかかわりなく、ただ「それ自身のうちに在り、それ自身によって考えられる」ものとだけ定義する。つまり、実体がなにものであるかという内容の問題をあえて無視し、その概念上の形式だけに注目する。同じように属性の概念も、「実体の本質を構成する」ことだけに着目して、それ以外の副次的な「性質」の概念を切り捨てる。つまりスピノザは、デカルトの提示した実体・属性概念から、事物の内容や性質に関係する曖昧な部分をすべて削ぎ落とし、それを論理の基本形式として純粋に取り出したのである。

この形式は、従来の実体・属性関係において暗黙のうちに前提されていた様々な存在論的区別を放棄するものである。そこでは、神やその他の様々な事物の存在という前提が取り払われ、神存在と事物存在との区別がなくなっている。しかもこの措置は徹底していて、同質の実体が自然の中で相互に区別されて複数存在することさえも許されない。そしてこれと呼応して、属性概念は、存在する事物の様々な在り方を「性質」として認識することを意味しなくなっている。属性は実体の本質を構成するだけ、つまり実体が何であるか（本質）を認識するだけで、その非本質的な偶有性には関係しない。つまり属性は、存在論的に区別されている複数の存在者の共通な性質を認識する形式ではもはやない。すなわち「同一属性を持つ複数の実体はない」ということになる。

通常考えられているような実体・属性概念は、基体の存在（実体）に対する性質の認識（属性）という、存在と認識における分離・結合の図式を引きずっている。デカルトもそこから抜け出ていない。スピノザが取り出した論

理形式としての実体・属性概念はこの図式を全面的に脱却している。むしろそれに代わって、実体と属性との、あるいは存在と認識との等価な関係といったものが示されていると言える。

二　自己原因と定義

証明の第二段階では、「自己原因」という概念を媒介にして実体の「存在」が積極的に論証されている。ここでスピノザは、「存在する各々の事物には、それが存在するある一定の原因が必然的に存する」(1p8s2)という充足理由の原理に従って証明を行っている。しかし、事物の自己原因ということで考えられているのは何か。

自己原因とは「その本質が存在を含むもの、あるいはその本性が存在するとしか考えられないもの」(1d1)である。また「原因」に関してスピノザは次の二種類を分類している。すなわち「ある事物が存在するその原因は、存在する事物の本性ないし定義自身のうちに含まれているか、そうでなければその事物の外部に存していなければならない」(1p8s2)。明らかに前者が自己原因に相当する。さらに『知性改善論』では、「創造されない事物の定義の要件」として次のように言われる。「一、その定義は一切の原因を排除しなければならない。言い換えれば、こうした事物は自己の説明のために自己自身の本質以外の何物をも要してはならない。二、一たびその事物の定義が与えられた以上は、それが存在するかどうかという問題の起こる余地があってはならない」[5]。ここで「一切の原因の排除」という表現は「自己原因」の概念に反するように見えるが、これを「一切の外的原因の排除」と考えれば『エチカ』で言われていることとほとんど一致する。

否定的な側面から見れば、自己原因は単に外的原因が欠如していることである。しかしスピノザは、事物が自己

原因として「存在」するという積極的な側面を、知性の作業である「定義」と本質的に関係するものとして語っている。事物が「存在」するのは、その事物の定義が「一切の外的原因を排除」し、その事物の本性（これはここでは「本質」と同義語である）だけを肯定しているからである。逆に言うと、知性が事物から本性を受け取りそれを定義できるのは、その事物が「存在するとしか考えられない」ほどその本質において明瞭だからである。

ここでもやはり、論理形式としての実体・属性概念とはやや異なる観点からではあるが、存在と認識との等価性が示唆されている。自分自身で積極的に、つまり外的原因を排除して存在する事物が先ずあって、それを知性がその通りに認識し定義するのではない。また、知性による認識・定義に従って、事物の積極的な存在が構成されているのでもない。そうではなくて、我々がある事物を見てそれが何であるか（本質）を認識すること、またある事物が存在すること、この二つが同じ一つの事態であるような論理が問題になっているのである。

定理一～八を通じて結論された「同一属性を持つ実体は自然の中でただ一つ存在する」という言明は、この論理を極めて簡潔に言い表したものである。それは「実体は自然の中にただ一つ存在する」という、ある種の存在論的な主張ではない。また「一つの本質認識（同一属性）は一つの実体しか構成しない」という認識論的な主張でもない。両者のどちらかに優位を与えることは、これまで考察してきたスピノザの「論理」からして許されない。事物をその本質において明瞭に理解することとその事物が存在することは、ここでは等価だからである。

三　より多くの実在性

定理九は「事物がより多くの実在性あるいは有を持つに従ってそれだけ多くの属性がその事物に帰せられる」と

いうものである。ここで「実在性 realitas」という言葉が出てくる。事物の「実在性」に多い・少ないという程度の差があることは、当時一般に認められていた。この語は、ある「事物 res」が「何かであること」の本質的な規定性を意味するものであり、同時に事物の「完全性 perfectio」と同じく、事物が事物として「より多く」その本来の在り方（本質あるいは価値・意味）に適っているかどうかを示す術語であった。[6] またこの概念は、「最も実在的な実有 ens realissimum」あるいは「最も完全な実有 ens perfectissimum」を予想させるものとして、伝統的な神の存在証明に極めて密接に関係している。しかしスピノザはこの概念を定義していない。そこでまず、『エチカ』の中で「より多くの実在性」という表現が使われている他の箇所を参照してみる。

「事物の定義が与えられると、そこから知性は多数の特質を（中略）結論する。そして事物の定義がより多くの実在性を表現するにつれて、言い換えれば定義された事物の本質がより多くの実在性を含むにつれて、それだけ多くの特質を結論する」(1p16dem.)。「思惟する実有がより多くのものを思惟しうるに従って、それはそれだけ多くの実在性あるいは完全性を含む」(2p1s)。「我々は一の観念が他の観念よりも多くの実在性ないし完全性を有することを認識する、すなわち一の対象が他の対象より優れていればいるほどその対象の観念もまた他の対象の観念よりそれだけ多く完全である」(2p49s)。

以上の言葉から我々は次の二つのことに気づく。第一に「より多くの実在性」に対応するものは必ずしも「より多くの属性」ではない、ということ。スピノザは、属性概念よりも広い意味を持たせている「特質」の多さにも、あるいは一つの属性における事物（ここでは思惟する事物ないし観念）の在り方の程度にも、同じく「実在性」の程度を対応させている。この意味で「実在性」は、すでに提示された実体・属性という論理形式とは差し当たって

関わりなく、むしろ我々が想定しうる様々な特質による認識や事物存在一般に関係して、それらの程度に対応する何かを示しているように思われる。私の捉え方では、事物の「実在性」とは、一つの事物が事物として、自分の意味や価値を体現しているその背景や状況一般を示すものである。それは、ある事物が「何であるか」（本質あるいは意味・価値）を成立させているところの条件のようなものである。別様に言えば、事物とその「実在性」との関係は一種の「図」と「地」のような関係であると考えることもできよう。スピノザの場合に限らず、この「地」を媒介にして「最も意味あるもの」も示されうる、つまり神の存在も証明されうるのである。

第二に気づかれるのは、スピノザが「より多くの実在性」という言葉を使用する時には必ず「〜であればそれだけ…である（Quo plus ~, eo plus ….）」という構文を使っている、ということである。この構文に従う限り、実在性も属性も、あるいは事物の特質やそれが含んでいる完全性も、必ずしも「一つ、二つ・・・」と数えられるような数的な「多さ」を意味しない。むしろ、ある連続した程度においてあらゆる事物の本質（あるいは意味・価値）が捉えられる、そのような「地」の在り方をこの構文は示している。そして、これがスピノザの「実在性」概念の独自性であるように思える。

この独自性は、実在性の程度に関してストア派やデカルトが行った定式化と比較すれば、より明確になる。中世ストア派は、事物の実在性の程度を、物質・生命・感覚・理性といった階層的・固定的な価値の秩序として説明した。そこでは、例えば人間はこの四つの実在性すべてを含んでいるが故に、物質という実在性しか含まない石よりも「多くの」実在性を持っているとされた。[7] デカルトは、「実在性の多種多様な程量」に関して[8]「実体は偶性あるいは様態よりも」また「無限な実体は有限な実体よりもいっそう多くの実在性を持つ」と考えた。しかしスピノザ

は、少なくともこれらの事物の実在性に帰せられている階層的・非連続的な秩序からは無縁である。

こうした意味・価値の連続性、あるいは意味・価値を成り立たせている「地」の連続性といったものは、自然や世界の捉え方に関して極めてラディカルな帰結をもたらす。そこでは、例えば石と人間との間には実在性の「程度の差」はあるものの断絶はない。同じように、石や人間と最高の実在性を含むと考えられる存在者（神）との間にも、原理的には何の超越や飛躍もない。なぜならそこには、存在論的なかたちで前提されるいかなる区別（物質/生命/感覚/理性、有限実体/無限実体）も取り除かれているからである。ここでも、超越的存在と自然における事物存在との間の区別が無効にされている。スピノザの「より多くの実在性」という概念は、こうした自然の捉え方を含む論理の「地」を示すものであると言えるだろう。

四　多くの属性からなる実体

定理九は「より多くの実在性」を「（より）多くの属性 plura attributa」に対応させている。前節での「実在性」に関する考察を踏まえると、これは次の二つのことを示しているように思われる。第一に、論理形式としての属性による認識にも何らかの程度の差があるということ。つまり、もし我々が何かを一つの属性の下において認識するなら、それは一定の実在性の程度のうちにあるものとして、言い換えれば「地」における一定の「図」として現れる。第二に、属性による認識が常に実体の本質を構成するものである限り、この「地」としての自然の連続的な在り方が実体の内容をなすことになる。

ここで明らかに「より多くの実在性」という考えを介して、実体・属性概念の意味が拡張されている。すなわち

実体・属性概念は、単なる論理形式以上に、それがどのような自然を捉えるのか、あるいはそこでどのような自然が現れるのか、といったことを含意するようになっている。別の言い方をすれば、論理形式としての実体・属性概念が自然の中で現実に作動し、そのことによって自然が認識における一つの条件として現れる、その仕方が示唆されているのである。ここで「論理形式が自然の中で作動する」というのは、我々が論理形式を実際に自然に適用する場面を意味している。しかし「論理形式の自然への適用」と言わないのは、スピノザの提示している「論理」そのものが、認識する形式とそれに適用される自然存在とを分離した図式に従っていないからである。

ところでこの拡張された実体・属性概念は、「多くの属性からなる実体」というかたちで表現されていると言える。また定理十ではこれをさらに厳密に規定して、「実体の各々の属性はそれ自身によって考えられなければならない」と言われる。この点を詳しく見てみよう。

各々の属性は、我々がそれによって事物を認識する時（論理形式が作動する時）、その事物における実在性の程度のうちにあるものとして、言い換えれば「より多くの属性」の中の一つとして自らを他から区別しなければならない。しかし、ある一つの属性が他の属性によって限定されることはない（1d2）。むしろ属性の間に区別が設けられるとすれば、それは「一（つの属性）が他（の属性）の助けを借りずに考えられる」（1p10s）という仕方、言い換えれば「各々の属性は自分自身によって考えられる」という仕方によってでしかない。各々の属性は、限定されない（無限である）という仕方でのみ他の属性から区別されるのである。

だがこの属性の在り方は、実体・属性概念を形式的に捉える限りでは、矛盾を呈する。そもそも「限定されないという仕方で区別される」という言い方が逆説的である。例えば、多数の属性が区別されているのだから属性の数

だけ多くの実体が存在する、と結論することは形式的には可能である。しかしこれは、定理一～八で出された「同一属性を持つ実体は自然の中にただ一つ存在する」という結論と矛盾する。なぜなら「属性の数だけ自然の中に実体が存在する」と言うのなら、その複数の実体を同時に捉えるている（限定されない仕方での）属性がどこかにあるはずであって、その属性は自然の中に複数の実体が存在することを認めていることになるからである。あるいはその属性は、実体の本質を構成しないが故に属性とはいえないにもかかわらず、複数の実体を構成している認識形式であることになる。これも明らかに矛盾している。

同様に「多くの属性を持つ実体」を、何か多くの要素（属性）を統合している統一体（実体）として想定することも矛盾している。この場合、要素としての属性が「それ自身によって考えられなければならない」のだから、それを統合している実体は「それ自身のうちにあり、かつそれ自身によって考えられるもの」(1d3)ではなくなってしまう。また「同一属性を持つ実体」とそれを統合する「多くの属性を持つ実体」との二種類の実体を、スピノザが想定してたとも考えられない。この二種類の実体を形式的に区別する限り両者が「統合する・される」という関係において説明されることになるのだが、この「関係」を認識するための論理は、すでにスピノザの実体・属性概念から排除されているからである。つまり「異なった属性を持つ実体は相互に共通点を持たない」(1p2)。とはいえ、「同一属性を持つ実体」と「多くの属性を持つ実体」とは、『エチカ』の文脈において明らかに異なった意味を持っている。私はこれを、論理形式とその作動の違いという観点から解釈するのである。[9]

この観点に立つ限り、実体・属性概念をめぐる矛盾は逆に、実体・属性概念という論理形式による自然認識の首尾一貫性を、究極的なかたちで表現していることになる。スピノザは言う。「実体の有するすべての属性は常に同

時に実体の中に存し、かつ一が他から産出されず、各々は実体の実在性あるいは有を表現する」(1p10s)。例えば「延長」という属性の下で自然認識を作動させる場合、我々はこの属性によって自然の全ての事柄を「他の属性の助けを借りずに」ないし「一が他から産出されずに」、言い換えれば自律的に捉える。そしてまさにこの属性による「認識」の自律的な資格においてのみ、自然が実体として自らの「存在」を表現するのである。そこでは「常に同時に」属性による認識の働きが、実体としての自然の中における一定の「図」として、つまり他の属性と区別されたかたちで自らを捉える。スピノザは、こうした自然における「認識の作動」と「存在の表現」とを、形式的ではあるが、「一実体に多くの属性が帰する」という言い方で固定したと考えることができる。

五　無限に多くの属性からなる実体

定理一～八では「同一属性を持つ実体は自然の中にはただ一つ存在する」ことを証明するのが問題であった。本稿では、これを論理形式としての実体・属性関係の展開として理解した。それは、事物を認識（あるいは定義）することがそのまま事物の存在であるような論理を示すものである。定理九と十において、今度は「多くの属性を持つ実体」に話題が移る。これを私は、自然における論理形式の作動と考えて考察を進めた。そこでは、自然を一定の属性の下で自律的に把握することと自然が自らの存在を表現することとが等価であるような論理空間が示されている。そうして定理十一でスピノザは、あらかじめ定義しておいた「神」すなわち「絶対に無限なる実有、言い換えれば各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなる実体」(1d6)の存在を証明する。

この神の定義は、定理十において議論された「(より) 多くの属性 plura attributa からなる実体」を「無限に多

くの属性 infinita attributa からなる実体」に置き換えているに過ぎない。すでに述べたように、属性の多数性が連続的な自然における認識の作動を示すものであるとすれば、「無限に多くの属性」とは認識における無限の作動を示すだけで、少なくとも「(より) 多くの属性」からの飛躍や超越を含むものではない。あるいは神の定義の説明にあるように、この「無限に多くの属性」という規定は、神の本質に「何の否定も含まないあらゆるものが属する」(Idem ex.)ことを明確にするためのものであると考えられる。それ以外は、すでに定理十までで展開されてきた事柄が定義のかたちに凝縮されていると考えてよいであろう。

このように定義された神の存在は、定理一～八での「同一属性を持つ実体」の存在証明と全く同じ仕方でなされる。つまり、事物を外的原因がないように定義することとその事物が「自己原因」として存在することが等価であるという論理によって、神の存在は証明されている。もう少し別の言い方をすれば次のようになる。定理十までで スピノザは、実体・属性概念によって独自な論理形式とその作動空間を提示した。そして定理十一では、この論理空間の存在を再び同じ論理を用いて証明したのである。スピノザは、自分の提示した論理に同じ論理を関係させただけなのである。これがスピノザにおける「神の存在証明」である。

しかし、まさしくこの「証明」によって、我々はスピノザの設定した論理空間の内にすっぽりと投げ込まれるのである。その中では、提示された論理形式を作動させること以外、要請されるものは何もない。あるいは、そのような論理上の効果の内にあることだけが、神を認識することであり神が存在することである。スピノザの「神の存在証明」は、超越的な者の存在や自然の存在を既成の論理によって証明しようとしたのでは全くない。また、神を頂点とする何らかの存在論的な自然構成の統合原理を提示したのでもない。むしろ、我々が自然を「延長」や「思

惟」として自律的に把握することができ、それが同時に自然存在の自己表現であるような、ある内在的な論理空間を設置したのである。

注

(1)『エチカ』からの引用は、以下の要領で略記号によって示す。第一部定理十八→1p18（定義d、定理p、系c、備考s、説明ex、証明dem.、など）。なお、原典はC. Gebhardt (hg.), *Spinoza*, Opera. Im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, (Heidelberg) 1925, Bd. II. ここに『エチカ』及び『知性改善論』が収められている。両書とも、邦文の引用に当たっては、畠中尚志訳（岩波文庫）を参照した。

(2) 第一部定理七の証明を参照せよ。

(3) デカルト、桂寿一訳『哲学原理』第五十一節（岩波文庫）一九六四年、六九頁。

(4) 同書、第五十三節、七〇頁。

(5) スピノザ、畠中尚志訳『知性改善論』第九十七節（岩波文庫）一九六八年、七六～七頁。

(6) J. Ritter/K. Gründer (hg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, "Realitas", (Basel) 1992, Bd. 8, SS. 187-185. 及び、廣松渉他編集『岩波哲学・思想事典』（岩波書店）一九九八年、二八七～八頁。

(7) J. Ritter/K. Gründer, 1992, SS. 187-185.

(8) デカルト、所雄章他訳『デカルト著作集2』「省察、第二答弁」（白水社）一九七三年、二〇一頁。

(9)「同一属性」と「（無限に）多くの属性」を持つ二種類の「実体」における解釈上の議論に関しては、柏葉武秀「スピノザの実体論」『哲学』四十八号、二〇八～二一七頁を参照。柏葉はこの問題を、神が「無限に多くの属性」の統一を保証する、というゲルー(Gueroult, M. *Spinoza I: Dieu*, (Paris) 1968.)の解釈への批判として展開し、スピノザ形而上学における「一と多」の問題を「疑似問題」であると結論している。本稿も、これとはやや異なった観点からではあるが、実体・属性概念における形式的な「一と多」の議論を批判するものである。

（大学院後期課程学生）